



Title	『古今和歌集』五九番歌に関する考察：桜と白雲の見立てを中心に
Author(s)	安, 佰潔
Citation	語文. 2026, 126, p. 41-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106103
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『古今和歌集』五九番歌に関する考察

——桜と白雲の見立てを中心に——

安 佰 潔

はじめに

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

① 桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲

(古今集・卷一・春上・五九・紀貫之)

これは、『古今和歌集』(以下『古今集』)に収録された紀貫之の作であり、詞書によれば、醍醐天皇の命により献上された歌である。歌意は、「桜が咲いたようだな、山の間から見える白雲は」というもので、「白雲」を桜に見立てる表現となっている。

『古今集』において、桜を白雲に見立てる歌はこの一首のみであり、『古今集』以前にも先行例は確認されていない。この点において特殊な表現であると言える。もっとも、以後の歌には同様の見立てが多く見られるようになることから、本歌はその先駆としての意義を持つ。

本稿は、桜を雲に見立てる歌の用例を整理したうえで、その成

立の背景としての『万葉集』以来の白雲表現、および漢詩における花と雲の見立てとの関係を検討する。さらに、詞書が示す本歌と帝との関係や、仮名序の記述に見られる「君臣合体」の理想を踏まえ、この見立ての成立事情を考察し、本歌の位置づけを試みたい。

一、桜を雲に見立てる歌

『古今集』成立以前には、桜を雲に見立てる歌の例は、管見の限り確認できない。貫之の没年頃までの用例を通覧すると、五九番歌(①)のほかに、桜を雲に見立てる表現は計八例が確認される。

② やへたてるみかさのやまのしらくもはみゆきさぶらふさくらなりけり
(京極御息所歌合・七・藤原忠房)

③ みよし野のやまべにたてるさくら花白雲とのみあやまたれつつ
(新撰和歌・四二)

(延喜十四年十二月女四宮御屏風のれうのうた、

ていじみんの仰によりてたてまつる十五首)

④山のかひたなびきわたる白雲は遠き桜のみゆるなりけり

(貫之集・三三)

法師にならむの心ありける人、やまとにまかりてほど
ひさしく侍りてのち、あひしりて侍りける人のもとよ
り、月ごろはいかにぞ花はさきになりやといひて侍り
ければ

⑤み吉野のよしのの山の桜花白雲とのみ見えまがひつつ

(後撰集・卷三・春下・一一七・読人知らず)

亭子院歌合のうた

⑥山ざくらさきぬる時は常よりも峰の白雲たちまさりけり

(後撰集・卷三・春下・一一八・読人知らず)

亭子院歌合・四・紀貫之

山ざくらを見て

⑦白雲と見えつるものをさくら花けふはちるとや色ことになる

(後撰集・卷三・春下・一一九・紀貫之)

古今六帖・桜・四一八一・紀貫之

⑧はるたてばさとにたなびくしらくもはさける桜のとほめな
りけり

(古今六帖・桜・四一七七・紀貫之)

⑨みよしのの山べにさけるさくらばなしら雲とのみあやまた
れつつ

(古今六帖・四二二八・山桜・紀友則)

⑩は三笠の山にたなびく白雲が、実は御幸をお迎える桜の花
であつたというもので、京極御息所(藤原時平女養子)が延喜二

一年(九二二)三月に宇多法皇とともに春日神社に参詣の折、大
和守藤原忠房が献じた二十首の歌の一首である。③を収める『新
撰和歌』は、貫之が主として『古今集』から秀歌と信ずる三十六
首を抽撰した歌集である。このことを踏まえ、水谷隆氏は、③を
『古今集』春上六〇番、

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

⑩み吉野の山べにさけるさくら花雪かとのみぞあやまたれける

(古今集・卷一・春上・六〇・紀友則)

の改変であると指摘している。⑩においては、吉野の山の桜が雪
と見誤られる趣向が詠まれているのに対し、③ではその「雪」が
「白雲」に置き換えられている。水谷氏はこの改変について、咲い
ている桜は白雲に、散る桜は雪に喩えるのがふさわしいとする貫
之の価値判断によるものだという。④は詞書によると、この歌は
延喜十四年(九一四)十二月、宇多法皇の命により、女一宮勸子
内親王の御屏風の資料として、献上した歌である。①と同じく「山
のかひ」や「見ゆる」という語を用いており、山の間にたなびい
ている白雲は、遠くの桜の花が見えているものだったという。⑤
の歌意は③とほぼ同じで、歌意及び表現の点から、『古今集』六〇
番の友則の歌(⑩)の影響下で成立した類歌と判断するのが妥当
である。⑥は延喜十三年(九一三)、宇多法皇が居所の亭子院で
催した歌合の歌であり、『後撰集』では読人知らずとされるが、
『亭子院歌合』十卷本では貫之作と伝える。山桜の咲き初めたさま
が、峰にかかる白雲の量を増したかのように見えるという。⑦は

貫之の歌で、これまで白雲に見えていた山桜の花が、散り際となり色が変わって見えるという。⑧は春になると里にたなびく白雲に見えるのが、実は遠くから眺めた桜であったという。これが貫之の歌とされる根拠は未詳だが、四一七一番歌の前に「これより十五首つらゆき」とあるため、本稿では貫之の歌として扱うこととする。⑨は③と歌意も同じで、同一歌の異伝と考えられており、やはり⑩の改変であろう。

以上、①から⑨までの九首のうち、③・⑤・⑨を同一歌の異伝もしくは類歌と見なすならば、重複を除いて七首が独立した作例として残る。そのうち五首は貫之の作である。さらに③については、貫之の手による改変である可能性も否定できない。つまり、桜と雲の見立ては、『古今集』撰者の時代に成立した新しい表現であり、『古今集』五九番歌はこの趣向を示す最初期の例と位置付けられる。その見立ての形成と展開において、貫之が中心的な役割を果たしたと言える。

また、以上の作例を踏まえると、当時の桜を雲に見立てる歌には、次のような共通傾向が認められる。

- (1) 桜の見立てに使われるのは「白雲」であること。
 - (2) 白雲に見立てる桜はほぼ山桜であること。
 - (3) 桜の細部ではなく、遠景としての広がりを見せていること。
 - (4) ほぼ視覚を直接に表す表現（見ゆ・遠目）が使われること。
- 『古今集』以前（または貫之以前）には明確な先例を見出しがたいこの見立ては、いかにして成立したのかを明らかにするため、

その成立背景について、次の二節で検討する。

二、「白雲」の様相

「桜＝白雲」の見立てには、両者の視覚的な類似性が前提となる。「白雲」なので、その色が意識されるのは当然だが、色以外にも類似性が考えられないだろうか。その点を確かめるため、本節では、『万葉集』から『古今集』に至るまでの「白雲」の用例を概観し、その詠法の特徴を整理する。

石川常彦氏は、『古今集』における「白雲」十一例を、

A群 矚目の景としての即物的「白雲」

B群 枕詞的序詞的修辭機能を中心に用いられているもの
C群 見立てによるもの

という三つの群に分類している。A群は自然現象としてのものであり、概念的な用法もあるものの、写景の即物的立場が保たれており、B群は、「白雲」の「立ち分かれ」るものや「絶ゆ」るものという属性を踏まえた、枕詞的・序詞的修辭としての用法であるという。『万葉集』における「白雲」の用例は三十二首確認できるが、どれもAとBの二群に収まり、C群に相当する明確な見立ての例は確認しがたい。『古今集』における「白雲」の用例は、『万葉集』の表現を継承しているが、C群（五九番・九二九番の二首）、つまり見立てによるものは新しい用法であろう。その性格を検討するために、A群とB群の「白雲」についても見ておこう。まずA群では、『万葉集』に次のような歌がある。

大納言大伴卿和歌二首

- ⑪ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方にしある
らし
(万葉集・巻四・五七四)

思君未尽重題二首

- ⑫はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は
(天平二年七月十日)

(万葉集・巻五・八六六・吉田宜)

⑪は、筑紫から上京した大伴旅人が、沙弥満誓の贈歌を受けて詠んだ返歌である。都からだとして、筑紫は白雲のたなびいているあの山の方角であろうという。遠方の親しい人のいる方向を「白雲のたなびく山」と表現する。⑫は白雲が幾重にも隔てる筑紫の国を遥か遠くから思いやっているもので、「白雲の千重に隔てる」という表現によって、筑紫の国がはるかに遠くにあることが示されている。

『古今集』には以下のような歌がある。

みちのくにへまかりける人によみてつかはしける

- ⑬しらくものやへにかさなるをちにてもおもはむ人に心へだ

つな

(古今集・巻八・離別・三八〇・紀貫之)

⑬の「しらくものやへにかさなる(白雲の八重に重なる)」は、幾重にも隔たる白雲によって距離を表現しており、『万葉集』の⑫と同じ発想である。自然景物の「白雲」は、以上のように、距離の大きさを視覚的に示す表現として機能している。

B群については、「白雲」が「立つ」「絶ゆ」などの語にかかる

という修辭的機能に関わるものであり、本稿で問題とする視覚的イメージの表現とは性格を異にするため、ここでは詳述しない。

また、「白雲」が立つ場所として、「山」の存在が目立つ。たとえば、

(旋頭歌)

- ⑭はしたての倉椅山に立てる白雲見まく欲り我がするなへに
立てる白雲

(右廿三首柿本朝臣人麻呂之歌集出)

(万葉集・巻七・一二八二)

- ⑮白雲のたえずたなびく岑にだにすめばすみぬる世にこそ有り
りけれ
(古今集・巻十八・雑下・九四五・惟喬親王)

⑭は倉椅山に立つ白雲を詠む。⑮においても、「白雲のたえずたなびく岑」というように、白雲を常に山にたなびくものとしている。『万葉集』において、「白雲」は山と結びつけて詠まれる例が最も多く、三十二例のうち、十四例が山にたなびく「白雲」である。『古今集』においても、十一例のうち四例が山における「白雲」である。

総じて言えば、『万葉集』における「白雲」は、遠方を表す時に使われる用例が多く見られ、山にたなびくものとして把握される傾向が強い。『古今集』における「白雲」の多くが『万葉集』における「白雲」の詠法を継承している。一方で、桜の花を白雲に見立てる『古今集』五九番歌と、滝を白雲に見立てる九二九番歌のみは、『万葉集』に明確な先行例を持たない発想であり、白雲を自

然景物としての視覚的類似性に基づいて新たな見立てを示す点に特徴がある。

ただ、前述のように、①から⑨までの歌に詠まれた桜には、主として山の桜を対象としていること、また、花の細部ではなく、遠景としての広がりを見せていること、という特徴が指摘できる。白雲の白い色、山に立ちのぼりたなびく様子、遠方を表現する点などは、こうした桜の特徴と類似している。つまり、『万葉集』以来の白雲の性質は、これらの歌の桜と白雲の見立てにも受け継がれている。言い換えれば、『古今集』までの歌における白雲のイメージの中に、桜と白雲の見立てが成立する条件がすでに用意されていた。だが、「白雲」と思って眺めていたものが、実は桜だった」という視覚的な誤認（誤つ）「見ゆ」「見えまがふ」「遠目」による見立てという発想が生まれる契機としては、漢詩文の影響も考えなければならない。次節で、『古今集』成立以前に受容されていた漢詩文における花と雲の見立て表現を検討しよう。

三、花を雲に見立てる漢詩文

中国では中唐までの漢詩文に、花を雲に見立てる表現が見られる。

- ㊦ 狎鴛雲布、窟咤星羅
光擬燭龍、色奪朝霞

（芸文類聚・卷八二・草部下・潘岳「芙蓉賦」）

- ㊧ 芳意將闌風又吹

芳意將に闌ならんとして 風ま

た吹く

白雲離葉雪辞枝

白雲 葉を離れ 雪 枝を辞す

（白氏文集・卷十三・六五〇・「惜玉蕊花有懷集賢王校書起」）

㊨ 根動彤雲涌

根動きて彤雲涌き

枝揺赤羽翔

枝揺きて赤羽翔る

（白氏文集・卷六四・三〇七一・「裴常侍以題薔薇架十八

韵見示因広為三十韵以和之」）

㊩ 剪刻彤雲片

彤雲の片を剪刻し

開張赤霞裏

赤霞の裏を開張す

（元氏長慶集・「紅芍藥」）

㊪ 可憐尽日春山下

憐れむべし 尽日春山の下

似雪如雲一万枝

雪に似たり 雲の如し 一万枝

（千載佳句・下・草木部・雜花・何玄「看花」）

㊦では咲き連なる芙蓉の花を広がる雲に、㊧では風に散りゆく玉蕊花を、葉を離れる白雲や枝を辞する雪に、㊨では赤い薔薇の花を沸き立つ赤い雲と舞い揺れる赤い羽根に、㊩では赤い芍薬の花を一片の赤い雲に、㊪では春の山の下に咲き連なる花を雪と雲に見立てる。以上の漢詩文における花と雲の見立ては、色彩（「白雲」「彤雲」）、動き（「離」「涌」）、形状（「布」「片」）といった雲の特徴を意識し、それを花の姿に重ね合わせることで成立していると言える。ほとんどの漢詩文において、「布」「離」「涌」「剪刻」などの動詞と併用され、雲の動きが見立ての構成要素として意識されている。それに対して、㊫の何玄の句は、雲の動きや形より

も、花の色彩と量感的な広がりによって重点を置く点に特徴が認められる。④は『千載佳句』に収載されているので、当時の日本の知識人層に広く享受されていたと推測される。

次に、『古今集』成立以前の日本漢詩の用例を見ておこう。

カ 看落花

落花を看る

落花数種色

落花数種の色

紫盈園圃望無極

紫盈園圃望無極

酩酊樓中鉛粉彩

酩酊樓中鉛粉の彩

擬奪機上霞錦織

奪はむとす機上霞錦の織

惜落花

落花を惜しむ

雲布星暉麗有餘

雲布星暉麗しきこと余有り

灑落叢薄蝶相伴

叢薄に灑落して蝶相伴ふ

飛点窓簾人不知

窓簾に飛点して人知らず

（雜言奉和・二・菅原清公・「奉和御製江上落花詞」）

③ 澄潭祇視彩浪起

澄潭祇に視る彩浪の起るを、

水底初疑白雲過

水底初めて疑ふ白雲の過ぐるかと。

（雜言奉和・三・紀御依・「奉和聖製江上落花詞一首」）

ク 在地輕雲縮

地に在りては輕雲縮る

非時小雪寒

時非らずして小雪寒し

（菅家文章・卷四・二五七・「法花寺白牡丹」）

カとキは、嵯峨天皇の「江上落花詞」に奉和した詩であり、前者は落花をたなびく雲に、後者は風に吹かれて川面に散り乱れる花を、水底を過ぎていく白雲に見立てる。クは白い牡丹の花を地

上に縮まった軽い白雲に見立てる。このように、日本の漢詩における花と雲の見立ては、中国の漢詩と同様に、花の色彩・広がり・量感と、雲の色・動き・形状との共通点に基づいて成立している。雲の色そのものが意識される場合には、「白雲」「彤雲」などの色名を伴うか、あるいは「雪」と併用されることによって、花の色彩との対応関係が明示される。これは、平安期の文人が漢詩的な見立てを積極的に受容していたことを示すものである。以上を踏まえると、花を雲に見立てる発想は、中国漢詩において確立し、日本漢詩においても受容されていたことが確認できる。この発想は和歌にも影響を及ぼし、五九番歌のように桜を白雲に見立てる表現の成立を促したと考えられる。

とりわけ、④何玄の「看花」は、春の山に咲き連なる花を雪や雲に見立てる句であり、その情景は五九番歌の「山のかひ」に咲く桜と対応させることができよう。また、雲の動きや形態よりも、花の色彩と量感的な広がりによって重点を置く点も、「あしひきの山のかひより見ゆる白雲」という遠景の視覚印象を中心とする五九番歌の表現とも共通している。

また、五九番歌に続く六〇番歌（⑩）は、山に咲く桜の花を雲に見立てた歌である。この二首はいずれも、遠く山に咲く桜を、視覚的な錯誤によって別の白いものに見立てる点で共通しており、連続して配置されることで、一つの小歌群を構成していると考えられる。この構図は、何玄の「看花」（④）において春山に咲く花を「雪」「雲」と重ねて詠む方法と重なり、花―雲―雪という白色

を基調とした視覚的連想が共有されていることを示している。花を雪と雲の双方に見立てる発想は、ほかの漢詩においても確認できる。たとえば①の「白雲離葉雪辞枝」や、②の「在地輕雲縮 非時小雪寒」では、いずれも白い花を雲と雪に重ねて捉えている。このような表現を踏まえるならば、五九番歌における桜と白雲の見立て、及びそれに続く六〇番歌との配列は、漢詩に見られる花―雲―雪の連想を背景に成立した可能性が高いと言えよう。『古今集』において両首が連続して配されていること自体が、この視覚的連想を際立たせる役割を果たしている。

以上の分析を踏まえると、五九番歌に見られる桜と白雲の見立ては、『万葉集』以来の白雲の遠景的イメージ及び山との結びつきを基盤としつつ、貫之が漢詩文に見られる花と雲の見立て表現を摂取することによって形成された可能性が高い。

だが、『古今集』においては、六〇番に見られるように、桜を雪に見立てる歌が主流である。このような状況の中で、貫之は五九番歌において桜を白雲に見立て、さらに同趣向の見立てを複数回用いている点が注目される。こうした見立ての選択は、単なる偶発的な発想とは考えにくい。意識的な修辞選択であった可能性が高いであろう。

五九番歌は詞書によれば、醍醐天皇の命により献上した歌である。貫之がなぜ雪ではなく白雲という見立てを選び、そしてそれを繰り返し用いたのかということも、このような詠作状況が示す帝との関係から検討してみたい。

四、「群臣合体」につながるもの

(一)「白雲」と「帝郷」

『古今集』撰者の時代以降、桜と雪の見立てが盛んになった時期、貫之は咲いている桜を白雲に、散る桜を雪に見立てるという使い分けを行っている。この点について水谷氏は、それが当時の一般的流行に従った結果ではなく、貫之自身の価値判断によるものだった可能性があるとしている。¹⁴⁾ 水谷論に従えば、五九番において咲く桜を白雲に見立てたことは、貫之自身が規範化した歌の詠み方を示すものであったと考えられる。

確かに、散る桜のはらはらと舞い落ちるさまは雪の降る姿と視覚的類似性を有するのに対し、山一面に咲き広がる桜は、山になびく白雲と重ね合わせられやすい。この点は、咲く桜を白雲に見立てることにこだわる貫之の「価値判断」の根拠となり得よう。しかしながら、五九番歌は貫之がこの見立てを初めて用いた例だとすれば、それを選択させた価値判断には単なる視覚的類似によるものでない、新たな契機が作用していた可能性も考えられる。とりわけ本歌の成立事情との関係も考慮すべきであろう。

五九番歌の詞書「歌たてまつれとおほせられし時によりてたてまつれる」によれば、この歌は貫之が醍醐天皇の命を受けて奉った献詠である。すなわち、詞書の記述に従えば、成立の時点において帝との直接の関係が想定される。

中国の漢詩文において、「白雲」はしばしば帝の居所である「帝

郷」⁽¹⁵⁾と深く結びつけられてきた。

⑦ 乗彼白雲、至於帝郷。 彼の白雲に乗り、帝郷に至らん。

⑧ 白雲自帝郷

白雲 帝郷よりす
(莊子・外篇・天地)

⑨ 帝郷白雲起

(南朝・沈約・「和王中書德充咏白雲詩」)
飛蓋上天衢 帝郷に白雲起こり、飛びて蓋ふ
上天の衢^{しやう}

⑩ 白雲帰処帝郷遙

(初唐・董思恭・「詠雲」)
白雲の帰する処、帝郷は遙かなり

⑪ ⑫は『芸文類聚』卷一「天部上・雲」や『初学記』卷一「天部上・雲第五」にも引用されている。これらの詩文において、「白雲」は「帝郷」から立ち上るもの、また、それに乗って「帝郷」に行けるものとされている。すなわち、白雲は単なる自然現象ではなく、帝の空間につながる象徴的存在として機能しているのである。

さらに、日本の漢詩に目を向けても、同様な用法が確認できる。

⑬ 常看順令未曾愆

順令を常に看る 未だ曾て愆^{あやま}らず

瑞雪呈豊又可憐

瑞雪 豊を呈して 又た憐れむべし

暗夜猶行明月地

暗夜 猶行く 明月の地

人間却踏白雲天

人間 却って踏む 白雲の天

⑭ 雲林禪院白雲中

(田氏家集・卷上・三八・「観禁中雪」)
雲林の禪院 白雲の中

耆旧相謀□□□□

耆旧相謀る□□(宮)

(寛平八年閏正月雲林院行幸記(仮題)・

奉和遊覧雲林院御製)

⑮では、雪が積もった宮中を「白雲天」に喩えている。これは単に白色の類似による比喩というよりも、宮中を仙界的空間として描き出す意図のもとに「白雲」の語が選択されたと理解されよう。⑯では、宇多天皇が雲林院を遊覧した際詠じた詩に奉和したもので、帝の離宮であった雲林院を「白雲」の中にあるものとして詠じている。以上の例から、日本漢詩においても、「白雲」が帝及び帝のいる場所と結び付けられていたことは明らかである。このような「白雲」の用法を踏まえるならば、醍醐天皇への献詠という場において、貫之が「白雲」の語を用いたことは、単なる視覚的見立てにとどまらず、「白雲」と「帝郷」との関連を意識していた表現であった可能性があるだろう。また、五九番歌より後の歌ではあるが、第一節で挙げた用例②「やへたてるみかさのやまのしらくもはみゆきさぶらふさくらなりけり」は、京極御息所が宇多法皇とともに春日神社に参詣の折に藤原忠房が献じた歌である。ここで三笠山の桜を「みゆきさぶらふ白雲」と詠むことは、法皇を迎える存在としての桜を描くものであり、「白雲」と「帝郷」との結びつきを前提とする表現と理解できよう。

以上のことから、五九番歌における「白雲」は、視覚的類似に基づく自然描写であると同時に、漢詩的教養に裏打ちされた象徴語として機能していた可能性が高い。貫之が献詠という場におい

てあえて「白雲」を選択したことは、そのような語の重層的意味を意識した修辭的判断であつたと考えられるのである。

(二) 五九番歌の詞書

『古今集』において、五九番歌と同様の形式の詞書を持つ歌は五首あり、いずれも貫之が醍醐天皇に献じた歌という形をとつて⁽¹⁷⁾いる。

五九番歌以外の四例は次のとおりである。

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

⑬かすがのわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらむ

(春上・二二)

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

⑭わがせこが衣はるさめふるごとくのべのみどりぞいろまさ

りける

(春上・二五)

⑮あをやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころび

にける

(春上・二六)

歌たてまつれとおほせられし時よみてたてまつれる

⑯ゆく年のをしくもあるかなますかがみ見るかげさへにくれ

ぬと思へば

(冬・三四二)

滝川幸司氏は、これらの歌が四季折々の召歌と理解しうるものであることに注目しつつ、詞書の内容があまりに具体性を欠く点を重視し、これらを貫之の新作歌だという。そしてそれは、仮名序に描かれた理想的な和歌世界を仮構するための手法であると指

摘している。⁽¹⁸⁾

確かに「歌を献上せよ」と帝が仰せになった時に詠んで献上した、という叙述のみを示すこの詞書は、他の詞書と比較すると特異である。『古今集』における貫之の歌の詞書(「題知らず」以外)を確認すると、これらの献詠歌以外は、すべて主題や歌の場など、何らかの具体的状況が明示されている。また、同じ献詠歌であっても、たとえば次のような例では、成立事情が比較的明確に記されている。

寛平御時、なぬかの夜うへにさぶらふをのことも歌たてまつ

れとおほせられる時に、人にかはりてよめる(古今集・巻

四・秋上・一七七・紀友則)

朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける(古今

集・巻四・秋上・二三〇・藤原時平)

法皇にし河におはしましたりける日、つるすにたてりといふ

ことを題にてよませたまひける(古今集・巻十七・雑上・九

一九・紀貫之)

これらはいずれも、歌の献上の状況が具体的に示されている。それに対して、前掲の貫之の献詠歌の詞書には、いつ、いかなる場で、何を題として詠まれたのかという情報が一切示されていない。そこでは、帝の命令に応じて歌を献上してきたという「歴史」(事実かどうか別として)のみが強調されているのである。この点を踏まえるならば、該当の詞書は具体的な出来事を記録するものというよりも、むしろ帝と歌人との関係そのものを象徴的に提示

する装置として機能している可能性が高い。滝川氏が指摘するように、これらの歌は、仮名序に描かれた、「いにしへの世々のみかど、春の花の朝、秋の月の夜ごとに、侍ふ人々を召して、ことにつけつつ歌を奉らしめ給ふ」という和歌の理想世界に似た状況を示している。すなわち、これらの詞書は、特定の場面を再現するというよりも、帝が命じ、歌人が応えて奉るという理想的秩序を形式化して示すものであったと考えられる。その意味において、五九番歌の詞書もまた、単なる成立事情の記載ではなく、帝との関係の中で成立する和歌ということを強調する表現であったと位置づけることができる。

このように見ると、五九番歌における「白雲」という語の選択は、前節で述べた漢詩的語彙の背景と、この詞書が構築する象徴的な帝—歌人関係の枠組みの双方を踏まえて理解されるべきものである。すなわち、詞書によって強調された「奉る」構図が、歌語の選択にまで及んでいる可能性があるだろう。

(三) 仮名序における桜と雲の見立て

仮名序には、桜を雲に見立てる記述が見られる。

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりぞひろ
まりにけるかのおほむ世やうたの心をしろしめしたりけむ
かのおほむ時におほきみつのくらあかきのもとの人まろなむ
うたのひじりなりける、これはきみもひと身をあはせたり
といふなるべし、秋のゆふべ竜田河にながるもみぢをばみ

かどのおほむめにしきと見たまひ、春のあしたよしのの山のさくらは人まろが心にはくもかとのみなむおほえける。

ここでは、奈良の御時の帝が竜田川の紅葉を錦に見立てたこと、また人麻呂が吉野山の桜を雲に見立てたことが、対句的に述べられている。竜田川の紅葉を錦に見立てる歌について、古注において次の歌を踏まえているとする説が示されている。

題しらず

②⑥ 竜田河もみぢみだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ

(古今集・巻五・秋下・二八三・読人知らず)

この歌には「この歌は、ある人、ならのみかどの御歌なりとなむ申す」との左注があり、仮名序の記述と一致する。したがって、二八三番歌は奈良の御時の帝の実作であったか否かは措くとしても、少なくとも仮名序の「秋のゆふべ竜田河にながるもみぢをばみかどのおほむめにしきと見たまひ」という記述を支える伝承が存在していたことは確かである。

それに対し、仮名序が言及する「吉野の山の桜を雲に見立てる」人麻呂の歌は、『古今集』には収録されておらず、『古今集』以前の用例も確認されていない。この点は古くから問題とされてきたが、人麻呂の「春のあしたよしのの山のさくら」を雲に見立てる歌の存在を否定し、それを挙げたのは、帝の「秋のゆふべ竜田河にながるもみぢ」という錦の見立てを対応させるためであり、対句的技法上の創作であるという説が主流である。

その中で、吉原栄徳氏は、この箇所を、貫之が仮名序において

王道思想に基づく和歌論を展開するために構築した論理的装置、すなわち君臣合体の構想の産物と位置付けた。奈良の帝と人麻呂、春秋を代表する桜と紅葉、紅葉の代表的歌枕である龍田と花・桜と結びつく吉野という配置は、その構想に即して選択されたものとされる。さらに氏は、貫之が仮名序の記述を權威づけるため、『万葉集』以外の伝承歌の存在を想定させる状況を設定し、その一環として五九番歌と六〇番歌の連続配置を機能させている可能性を指摘している²²。

『古今集』以後に貫之が複数の歌で「桜と白雲の見立て」を詠み続けたこともまた、仮名序に提示された人麻呂の桜と雲の歌を踏まえたものとして、その歌があたかも実在したもののように位置づける働きをもつと考えられる。すなわち、こうした詠作は、仮名序の記述を補強する営みとして理解できよう。

無論、人麻呂の桜と雲の歌は、そもそも存在しなかったのではなく、長い伝承過程のなかで散逸した可能性も（これまでの説では極めて低いとされるが）理論上は想定しうる。しかし、仮にそのような歌が存在したとしても、それが後世の和歌表現に明確な影響を及ぼした痕跡は確認しがたい。したがって、「桜を白雲に見立てる」という発想の普及と定着において、貫之が果たした役割の重要性は揺るがないと考えられる。

また、仮名序と『古今集』本文との成立前後関係については、なお議論がある。仮名序に見られる桜と雲の見立ての記述が、五九番歌に先行するのか、あるいは後のものであるのかによって、五

九番歌の位置づけも変わってくる。仮名序の記述が先行する場合には、吉原氏が指摘するように、君臣合体の理想を表現するためには、奈良の御時の帝の竜田川の紅葉の歌と、人麻呂の吉野の山の桜の歌とを対応させる構想がなされ、さらに、その構想を支えるものとして、五九番歌が位置づけられたとみることもできる。一方、仮名序が後に成立したとすれば、貫之が自らの歌に詠まれた表現の先駆として、人麻呂の表現を提示したことになる。すなわち、人麻呂の桜と雲の見立ては、貫之自身の表現を古代に遡らせて語る装置として機能していると解することもできよう。いずれの成立順を想定するにせよ、五九番歌が猷詠歌という形式をとることを踏まえれば、そこには貫之が自らを人麻呂の継承者として位置づけ、君臣合体の理想世界を体现する存在であると自負する姿勢がうかがわれる。さらに、「白雲」が「帝郷」とかわること、また、五九番歌の詞書が仮名序に見られるような世界を仮構するための手法とみなしうることをあわせて考えるならば、桜と白雲の見立ては、君臣合体の理想世界の表現にふさわしいものとして選択されたともみることができよう。

五、まとめ

本稿は、『古今集』所収の貫之の五九番歌を中心に、桜を白雲に見立てる表現の成立とその背景について検討してきた。

まず、『万葉集』及び『古今集』における白雲表現では、白雲が遠方を表現する機能を持つことや、山にたなびくものとしての具

体的な視覚的イメージを伴う景物とされていることが確認できる。さらに、中国と日本の漢詩においては花を雲に見立てる表現が珍しくなく、花の色彩や量感を雲に重ねるという修辭的基盤が平安

前期の文人層に共有されていたことを確認した。それらが桜と白雲の見立てを成立させる条件であったと言える。だが、その見立てが『古今集』の貫之歌に初めて見られることや、彼がその見立てを繰り返し用いたことには、新しい価値判断が作用しているように思われた。そこで、「白雲」と「帝郷」との結びつき、五九番歌の詞書の特質、仮名序における帝と人麻呂の配置構造などを踏まえて検討してみると、この見立ては勅撰集という事業を担った貫之が構想した和歌の理想、すなわち君臣合体の意識と無縁ではなかった可能性が考えられる。

以上の検討により、最初の勅撰和歌集である『古今集』において、貫之が桜を白雲に見立てる表現を新たな形で展開し、それを反復的に用いることで、新たな和歌的価値を提示しようとした可能性の一端が明らかとなった。とりわけ、このような見立ては、『古今集』という編纂事業全体の理念との関わりの中で位置づけが考えられる点が重要である。

もっとも、貫之の工夫は五九番歌や仮名序のみにとどまるものではなく、語彙・修辭の選択、歌の配列、さらには採録の取捨といった多方面に及んでいると考えられる。これらの点についてはすでに先行研究においても個別に論じられてきたが、対象にはなお検討の余地が残されている。今後は、こうした未検討の作例に

も目を向け、個別の分析を積み重ねておくことで、本稿で示した視点の妥当性をさらに検証していきたい。

注

- (1) 『国歌大観』『京極御息所歌合』解題(藤岡忠美)による。
- (2) 『国歌大観』『新撰和歌』解題(迫徹朗)による。
- (3) 水谷隆「紀貫之の新撰和歌編纂の意図―古今集からの歌句の改変―」(国語国文64(10)・一九九五年十月、20～38頁)。
- (4) 『後撰集』一一七番歌(5)は、その詞書から、出家を考えていた人が、知人から「桜が咲いたか」と尋ねる手紙を受け取り、その返事として詠んだ歌であることがわかる。『古今集』六〇番(10)の「雪」を「白雲」に改変したのは、隠遁生活には「白雲」のほうがふさわしいと考えたためであろうか。
- (5) 『国歌大観』『亭子院歌合』解題(藤岡忠美)による。
- (6) 室城秀之「古今和歌六帖(下)」(明治書院・二〇二〇年)において、この歌は『古今集』六〇番や『新撰和歌』四一番などと同じ歌として扱われている。
- (7) 石川常彦「『白雲』考―新古今の素材論のために―」(『新古今の世界』和泉書院・一九八六年)。
- (8) 大宰帥大伴卿上京之後、沙弥満誓贈卿歌二首
まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ(五七二)
ぬばたまの黒髪変り白けても痛き恋には逢ふ時ありけり(五七三)
(9) 山(14例)二四三・二八七・三一七・三五三・三七七・五〇九・五七四・六六八・七五八・一二八・一六八・二三三・四〇〇・六・四一二。海原(1例)一〇八九。箱(1例)一七四。野(1例)三二七。奈良の都(1例)三六〇。山の木末(1例)三九五七。明記されていない歌(13例)八六六・九四二・九七一。

一五二〇・一七四七・一七四九・二〇二六・二〇四一・三三二九・三三六〇・三五二七・三九五八・四〇〇三。九七一・一七四七・一七四九は「タツ(竜田の山)」にかかる枕詞なので、「山」の数に入れないことにする。

- (10) 山(4例) 五九・四六一・六〇一・九四五。野(1例) 八五六。場所明記されていない歌(6例) 三〇・一九一・三七一・三七九・三八〇・九二九。

- (11) 中国では現存資料がない。

- (12) 三木雅博は、「千載佳句」の部門の構成に関する考察において、「千載佳句」に採られた大量の佳句が、維時によって一時に唐人の詩集から抽出されたものではなく、平安前期の文人たちが、自らの詩藝を豊かにするために、元白詩をはじめ当時船載されていた唐人の総集や別集から営々と佳句の抄出を続けてきた、その蓄積の成果を集大成したものではないか」という。『和漢朗詠集とその享受増訂版』勉誠出版・二〇二〇年、一九九三年初出。

- (13) 桜を雪に見立てた歌四首(六〇番・六三番・七五番・八六番)、錦に見立てた歌一首(五六番の柳と桜、水の泡に見立てた歌一首(八一番)、波に見立てた歌一首(八九番)。

- (14) 水谷前掲論文。

- (15) 「帝郷」は、仙人の住む天上・仙境を指す語であると同時に、帝の居所、すなわち都を意味する語でもある。そして奈良時代には、すでに天皇の居所を仙境に擬する漢詩表現が存在していた。

- (16) 「寛平八年閏正月雲林院行幸記」は紀長谷雄が記したものであるが、この「記」に収録された本文の詩「奉和遊覧雲林院御製」の作者は不明である。なお、引用本文は三木雅博「紀長谷雄漢詩文集並びに漢字索引」(和泉書院・一九九二年)による。

- (17) 『古今集』の詞書では、回想の助動詞には、一般に「けり」が用いられるが、この四例(五首)と一〇〇二番歌は「き」が使用され

る。しかも、すべて貫之が醍醐天皇に献上した歌である。また、貫之の宇多天皇への献詠歌も、別の歌人の醍醐天皇への献詠歌も、「き」ではなく、「けり」が使用される。これについては、片桐洋一「古今和歌集の場」(『古今和歌集の研究』明治書院・一九九一年)や、辻田昌三「古今集詞書の立場」(『文林』19・一九八四年二月、146頁)に詳しい。

- (18) 滝川幸司「天皇と文壇―平安前期の公的文学―」(第一章「宇多・醍醐朝の歌壇―貫之の和歌献上―」(和泉書院・二〇〇七年)。

- (19) ここでいう「歴史」とは史実を指すのではなく、貫之が意図的に構築しようとしたものである。

- (20) たとえば、「文章のかざりなり。人丸の歌にはなき事なり」(『古今和歌集兩度聞書』)、「よし野山さくらと云事なき歌也。是は対句に書たるべし。万葉の歌を勘て申人あれどもそれまで無証歟」(『六卷抄』)、「吉野の山の桜、人丸歌なし。但、龍田・吉野、花・紅葉を対句に書。君臣合体の句の心を合たる歟」(『蓮心院殿説古今集注』)、「これに当たる歌は見えない。人麿の時代には、まだ、吉野山は桜の名所となっていなかったらしい」(佐伯梅友「日本古典文学大系 古今和歌集」岩波書店・一九五八年)、「吉野山の桜を詠んだ歌は六〇・五八八などがおそらく最古で、人麿の歌には見当たらない。上の「秋の夕べ」の句と対偶せしめただけで、典拠はないとみる」(小沢正夫・松田成穂「新編日本古典文学全集 古今和歌集」小学館・一九九四年)、「吉野山の桜を人麿が雲と詠んだ歌はない。「なら帝」も人麿も、「古今集」の主たる歌風である見立ての歌をそれぞれ秋と春に詠んだものとして、君臣一体を強調する」(高田祐彦「新版古今和歌集」角川文庫・二〇二〇年)など。

- (21) 吉原栄徳「古今集かな序難疑(2)」(園田国文4・一九八二年、124頁)。

- (22) 五九番歌は桜を白雲に見立てるが、その舞台は「吉野の山」では

なく、古風な枕詞を用いて「あしひきの山」と詠まれている。これに続く友則の歌は吉野の桜を詠む。この二首の連続配置によって、仮名序に見える人麻呂の「吉野の山の桜」と「雲」との見立てが想起され、その記述を是認させる効果をもったと吉原氏はいう。

引用本文

(一) 和歌

新編国歌大観（日本文学web図書館）。

必要に応じて表記に改めた。なお、『万葉集』の歌番号は旧番号を用いる。

(二) 日本漢詩文

『菅原文草・後集』——川口久雄校注『日本古典文学大系 菅家文草・菅家後集』（岩波書店・一九六六年）

『雑言奉和』——小島憲之『国風暗黒時代の文学 中（下）Ⅰ——弘仁・天長期の文学を中心として』（塙書房・一九八五年）所収「弘仁期の詩（一）」——『雑言奉和』の詩を中心として——

『千載佳句』——金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集——句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館・一九四三年）研究資料篇

『田氏家集』——小島憲之監修『田氏家集注 卷之上』（和泉書院・一九九一年）

(三) 中国漢詩文

『芸文類聚』——汪紹楹校『芸文類聚』（中華書局・一九六五年）

『白氏文集』——岡村繁釈注『白氏文集』（新釈漢文大系・明治書院・一九八八―二〇一八年）

『元氏長慶集』——冀勤校『元稹集』（中華書局・一九八二年）

『莊子』——郭慶藩撰、王孝魚校『莊子集釈』（中華書局・一九六一年）

『初学記』——司義祖校『初学記』（中華書局・一九六二年）

その他「清彭定求等撰『全唐詩（增訂本）』（中華書局・一九九九年）」

注記した文献も含め、漢字は原則として通行の字体を用いた。引用文中の傍線は執筆者によるものである。

付記

本稿は、令和八年度大阪大学国語国文学会（令和八年一月十日、於大阪大学）における口頭発表に基づく。席上ご教示を賜わった諸先生方にお礼申し上げる。

（あん・はくけつ 本学大学院博士後期課程）